

第8号

2016年5月15日

発行者

がん哲学外来市民学会
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3
がん哲学外来研修センター
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389
E-mail:shimin@gantetsugaku.org
http://www.shimingakkai.org/

がん哲学外来市民学会 ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People



がん患者を支援する 居場所づくり



金沢赤十字病院 副院長
西村 元一

昨年がん哲学外来市民学会を金沢で開催させていただいて、この号が出るときにはほぼ一年とまではいきませんが、十か月余りが経過したことになります。昨年の三月末に進行胃がんが見つかり抗がん剤治療を受けた後、6月23日に手術をうけ、そのほぼ三週間後にビデオで参加させていただいたのが、本当に、昨日のことのように思い出されま

す。学会の前後にはたくさんの方々がお見舞いに来て下さり、そのことが闘病に対して大きな意欲になったことは言うまでもありません。もともと胃がんが根治不能ということで、今年の石巻の学会の時には当然ながら、生きているか？死んでいるか？わからない状況であったにも関わらず、東京での学会の帰りに当院へ寄っていただいた石巻赤十字病院長の鈴木聡先生に「来年は出席します！」と約束したことが実現できそうな状況になったのも、ある意味夢のような感じがしています。

さて、がん患者経験も一年を過ぎて、今後どれだけの時間が残されているかはわかりませんが、その中でやりたい目標を二つ掲げています。一つは、やはりがん治療に関わってきた医師が、がんになったという生活を活かしてもらうためにも、色々自分が体験したことや思ったことについて情報を発信していきたいということ。おそらく医療者にとってもがん患者さんやその家族にとっても、役に立つことが少なくないと思っております。そしてもう一つは以前より仲間とぜひ作りたいと思っていた「Maggie's cancer caring centre」のような生活の場におけるがん患者の支援施設を実現することです。

昔と比べるとがん治療はどんどん進歩していますが、一方で病院はより効率化され、かつ在院日数が短くなり、治療の一部は外来でおこなわれるようになってきました。また当然ながらがん患者は一旦「がん」と宣告を受けると治療がほぼ終了したとしても「生頭の片隅にはがん」という二文字があり、ちょっとした変調でも心配になってしまいます。そのような状況を鑑みても生活の場（病院の外）にがん患者もしくはその家族も含めて支援するような施設は必須だと思っていました。

今回、自分自身ががん患者となってみると従来よりははるかにがん患者に対する支援体制が整ってききましたが、あくまでも病院内がメインであり、家にいる時、もしくは日々の生活の中にある状況ではまだまだ不安が少なくないような気がしています。そのような不安を感じて聞いてもらえるような場所は皆無と言ってもいいような気がしています。

また、たとえば同じような病気で同じような治療を受けた患者さんは生活する上で、医療者にはわからないようないろいろな工夫をしています。そのような工夫をぜひ聞いてみたいですし、自分の工夫も希望があればぜひ伝えたいと思いますが、なかなかそのような場がないのも現状です。

そして患者は病院の中では一人の患者にすぎませんが、病院の外では患者であるとともに生活者でもあります。患者が即生活者となることは簡単なように思われますが、人によって結構



金沢都ホテルで開催されたがん哲学外来市民学会第4回大会。全国からの参加者に感動と共感を与え、盛會裏に終了しました。(2015.7.12)

がん哲学外来市民学会第5回大会

テーマ「こころに寄りそう」

石巻赤十字病院 副院長 鈴木 聡

第6回がん哲学外来コーディネーター養成講座(7月9日)と、がん哲学外来市民学会第5回大会(同10日)のプログラムは東日本大震災ともつながりがあります。「もう」なのか、「まだ」なのか、あの震災から五年が過ぎましたが、今度は熊本・大分で多くの人々が試練と向き合っています。

昨年の金沢大会のテーマ「傾聴」も、今年の石巻大会のテーマ「こころに寄り添う」も、決して「がん」だけに向けられる言葉ではなかったようです。病気でも、災害でも、どんな試練でも、それに立ち向かう人々を支える力。それが私たちの中で醸成されていく場。それが「がん哲学外来市民学会」。そんな思いで準備しています。

「がん哲学外来市民学会第5回大会」は軽井沢朗読館館長の青木裕子さんによる詩の朗読で幕を開けます。青木さんが選んだ一冊の詩集。どの詩も美しく、力があつて、優しさにあふれています。その中から珠玉の数編を、小澤章代さんのチェンバロ演奏と共に聴きいただきます。

の石塚真人さんから「秋田がんささえ愛の会」について、曹洞宗通大寺住職の金田諦應さんからは傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」について、河北新報社編集局報道副部長の松田博英さんには臨床宗教師の誕生と活動に関する特集記事「挽歌の宛先」についてご講演いただきました。そして締めは樋野興夫先生から「がん哲学外来」の精神についてたっぷりとお話を伺います。

お昼には大室南部神楽を間近でご覧いただけます。大室南部神楽は東日本大震災で壊滅的な打撃を受けた石巻市十三浜大室地区に伝わる伝統芸能でした。人口減少によって震災前に一度途絶えていましたが、震災後に保存会のみなさんが復活させてこの神楽と共に幾多の困難を乗り越えています。

前号のニュースレターで、カフェ・デ・モンクの「モンク」は「Mont(お坊さん)」で「文句」で「悶苦」ですが、もう一つのメッセージが込められているそうです、とお知らせしました。会場の外には本物のカフェ・デ・モ

ンクが出店しますから、ぜひ立ち寄りいただき、そのメッセージを見つけてください。ヒントですか?とあえず、ジャズと関係があります、とだけ申し上げておきましょう。

では、みなさんの石巻への越しを心からお待ちしております。

第6回がん哲学外来
コーディネーター
養成講座に寄せて

一般社団法人がん哲学外来
市民学会担当理事

安藤 潔

本年のがん哲学外来市民学会第5回大会、第6回コーディネーター養成講座は石巻で開催されます。今回もたいへん充実したプログラムが予定されています。準備委員の皆様には感謝申し上げます。

コーディネーター養成講座は昨年の12月1日より参加募集を開始いたしました。大変な好評のため、わずか2週間で満席となり、ご希望に添えなかった皆様にはお詫び申し上げます。

養成講座はグループワークを行うため参加者は100名を上限としており、今後も同様の事態が続くようであれば複数回開催

など何らかの対策を講じる必要があると認識しております。

また3回以上ご参加頂いた認定コーディネーターの皆様には、グループファシリテーターとしてのみ参加をお願いしております。その代わりに認定コーディネーターを対象としたアドバンスコースを5月14日に開催いたします。今回は第一目の試みなので、参加希望者の皆様から頂いたトピックを中心に皆様と研鑽する予定です。

4月15日に品川で開催された「がん哲学外来市民講演会」(スウェンソン主催、資生堂共催)で、埼玉医科大学国際医療センターの大西秀樹先生(全国で唯一の「精神腫瘍科」教授)から、がん患者さんの告知以後の心の回復過程についての講演をお聞きしました。

東日本大震災から五年が経過いたしました。あの時テレビに映し出された石巻赤十字病院の様子は全国の国民の目に焼き付いています。今回、石巻でがん哲学外来市民学会の大会と養成講座を開催して、患者さん、ご家族、市民、医療従事者が一同に会して、その復興の様子(「心の回復過程」)に接することができることは、参加者全員にとって大きな励みになることと存じます。

七月に石巻で皆様とお目にかかれたいことを今から楽しみにしております。

掲示ポスター募集



- 作成方法: 手書きでもパソコンでも自由です
- パネルサイズ: 83cm×58cm
- 展示スペース: 先着20カフェ
- 募集締め切り: 6月15日
- 送付先: 石巻赤十字病院

〒986-8522 宮城県石巻市蛇田字西道下71番地
担当: 総合患者支援センター 藤澤 宛
☎: 0225-21-7220(代) 平日(月~金)8:30~17:00

※カフェ名は大会プログラムに掲載するので正式名称を明記して下さい。

各地からの

カフェだより

東北に寄り添う

勝海舟

渋沢栄一記念

王子が哲学外来
メディカルカフェ

江川 守利

「天災とは言ひながら、東北の津波は酷いではないか。政府の役人は、どんなことをして手宛をして居るか、法律でござい、規則でございと、平生やかましく言ひ立て居る癖に、この様な時には口で言ふ程に、何事も出来ないのを、おれは実に歯痒く思ふよ」(勝海舟「氷川清話」より)
被災者に寄り添う勝海舟がよく表されている言葉です。東北の津波は勝海舟の生きた幕末、明治と起こっています。自らが船に乗って遭難した経験と常に庶民の中に入って同じ目線で行動する勝海舟だからこその言葉だと思えます。

東京の北区王子で始めた渋沢栄一記念が哲学外来メディカルカフェも今年九月で二年になります。渋沢栄一は北区王子に最初は別荘として多くの来賓を招きました。晩年は自宅として住み着いています。樋野先生が尊敬される新渡戸稲造も訪れています。新渡戸稲造は「太平洋の懸け橋にならん」と国際平和に尽力しますが、渋沢栄一も日米の友好関係を築くため太平洋問題調査会を設立して新渡戸稲造と共に行動します。また渋沢栄一は東京養育院などの医療福祉施設にも力を入れています。メディカルカフェの参加者と共に北区王子の飛鳥山公園内にある渋沢史料館を見学したり渋沢栄一の精神を学びながら進めています。

**がん哲学外来お茶の水
メディカル・カフェ**

代表 榎原 寛

お茶の水メディカル・カフェは来る五月を迎えると、満四年になります。ひと月に一回の割です。今年、48回になります。したがって今年、五月に四周年スペシャル、七月に50回を記念するスペシャルを企画中です。



ところで、最近、お茶の水メディカル・カフェにおいて、こんな話が出ています。「二人にひとりがんになるって話があるけれど、最近、15人にひとりがんになるんじゃない」「そうだよ。だから、がんになつていない人のほうが肩身が狭くなる時代が来ているんじゃない」。

だからといって、誰もががんになれという意味ではないので誤解をされないように。

お茶の水メディカル・カフェは毎回、60名から70名の方々がお集まりくださっています。グループに分かれての懇談の時、10テーブルに分かれますから、互いに話に乗っていると、声や熱気が交錯し、椅子と椅子がくっつき、おしりとおしりが近づき合っ、しりあいの仲 など、大家族の賑わいを感じさせてくれます。

樋野先生は、「大病院ほど患者同士、患者と医師とがコミュニケーションを取る場が十分ない。メディカル・カフェでは、リラックスした雰囲気を作ることで意思の疎通がうまくいく。最初は一杯のお茶から始まる。がん患者とその家族の心理負担軽減へ、患者・医療スタッフ・専門家との対話を重視したサロン形式のカフェである」と言われていますが、それに家族が加

わり友達が加わり、大家族さながらです。

四年間には、お茶の水メディカル・カフェにおいて、数名の方が他界されることがありました。それは悲しみや寂しさがありました。が悲壮や悲惨ではありませんでした。その人その人によって、内村鑑三が主唱し、樋野先生が提唱する「勇ましい高尚なる生涯」における「最大遺物」を残された生涯でありました。それは遺族の人々にとっても生きる力となっています。しかも、遺族の中には、意思を継いで、メディカル・カフェに続いておいでくださっている方もあります。中には、スタッフのひとりとなつてボランティアに加わつておられる方もあります。

これは、生き死にの日々の中で、どんなに大きな力を感じさせてくれることでしょうか。



万座メデイカル

ヴィレツジ構想

がん哲学外来

カフェin万座

市村 雅昭

「がん哲学外来カフェin万座」、この万座の名前がどの程度の知名度なのか、今でこそ万座温泉の泉質が世間に認められ、そこそこのものになって来ましたが、この標高1800m、最短の村落から23kmも離れた温泉地に、バス便が通行できる道路が開通したのが、昭和28年、今から僅か60年あまり前の事なのです。

それまでは群馬県の西端、長野県との県境の原生林に囲まれた湯治場として数軒の宿で営まれてきました。

その後スキーと秘湯ともいえる万座温泉の泉質の良さが評判を呼び、観光地としてようやく多くのお客様を迎えるようになりました。

樋野先生と万座温泉日進館の経営者とは懇意であることから、樋野先生は万座を何度か訪問され2012年には「がん哲学外来カフェ」の開設をこの日進館に提言され、がん哲学外来の先駆者として活動されている「佐久ひとときカフェ」の方々のご指導の下、毎

年開催し樋野先生にも毎回足をお運び頂いています。

この時、先生は既にこの地を「メデイカル・ヴィレツジ」とすべしとの示唆もなされているのです。そこで昨年、賛同して頂ける婦恋村の企業、病院、そして佐久市からのご出席者のもと、「がん哲学外来メデイカル・ヴィレツジin万座」構想シンポジウムを開催し、樋野先生から力強く「外来カフェ」から「外来メデイカル・ヴィレツジ」へ、構想発展に向けて万座独自の方法を探り、その実現に邁進するよう貴重なお言葉を頂きました。

今年6月25日、26日の二日間、日進館に於きましてその「がん哲学外来メデイカル・ヴィレツジin万座」を今回は婦恋村の行政御関係者をお招きして、その他ご賛同頂いている有志の方々構想シンポジウムを開催させていただきました。行政、医療、その他それぞれの方が携わる部門でメデイカル・ヴィレツジ構想のご意見を賜りたく、多数の方のご参加をお待ちしています。



宿泊客で満席の樋野先生の講演会

メデイカル・ヴィレツジ構想シンポジウム

万座温泉・日進館にて (2015.05.24~25)



自然に出来た私の「場づくり」

いるか薬局 薬剤師

吉江 福子

私の職場は薬剤師二名、事務二名一日平均患者数120名ほどの小さな薬局で平成5年10月に眼科をメインに始まりました。まだ医薬分業が珍しい時代です。途中デイサービスセンターの施設長を経験

し、音楽療法に夢中になったりもしました。しかし大きな経験は10年ほど前の乳がんです。その後がんサバイバーとしてがん活動をやる中で、所属する「京都がん医療を考える会」のメンバーとして震災後の福島を訪問、樋野興夫理事長のご講演を拝聴したのが「がん哲学」との出会いでした。

10年前と「二人に一人はがんになる」と言われる今の時代を見てみるとがん事情も大きく変化したように感じます。その中でがん哲学が大きく成長していったのは、がん患者、家族が一番必要としている「医療の隙間をうめること」に目標があったからだと痛感しています。最近頂きました樋野先生の新著のチラシを拝見し、「がん哲学外来メデイカルカフェ」が80か所を超えたことがそれを物語っていると思います。がん患者、家族のためのカフェが自然に増えていくことは如何に必要であるかの現れでしょう。

私の「メデイカルカフェ」の立ち上げはごく自然に出来たものでした。調剤薬局ではがん患者様が増え、在宅医療の訪問も増えました。薬の相談から生活の相談、摂食に関する悩みと様々な問題が出て来ました。「薬局だけでは十分な会話が出来ない」現状が見えてきたのです。

そこで「カフェ」の形を取るならば飲食業の許可を取得し、長期

にわたるがんとの闘いの中で、お元気な頃と同じようにゆつくりと、そしておしゃれ心も持つて時間を過ごして頂けるレストランを作りたいと思うようになりました。まず五感に心地よいレストラとは何かを考え、環境作りから始めました。その中で絹糸を使った壁紙で特許を取得した方にお会いし、絹と金で作った屏風を出雲大社に寄贈されたことを知り、屏風と同じ素材を使った特別室をレストランに作りました。樋野先生の故郷の出雲につながりました。



がん哲学学校 in 神戸 メディカル・カフェと がん哲学塾

神戸薬科大学
薬学臨床教育センター

横山 郁子

2014年八月に第1回がん哲学学校 in 神戸を開催してから二年が経ち、2016年七月二日で第8回を迎えることができました。参加して下さる方がいらっしやるかどうかわからない不安の中、「やり始めたことは、三年続けないといけないね」という樋野先生のお言葉に背中を押されてここまでまいりました。これも多くの皆様のお力をいただいたのと感謝申し上げます。

本学では大学での開催ということもあり、何か「学び」をお持ち帰りいただければと様々な内容の講演を行っています。また、学生が参加していることも特徴となっております。今の若者は、核家族化の社会の中であまり「老い」や「死」を体験することなく育っています。学生にがん患者さんとお話することに対してどう思うか聞いてみると、「お話ししたいが不意な言葉で傷つけてしまったらどうしよう」、「どんな言葉を

使ったらいいのわからなくて言葉が出なくなってしまう」という答えが返ってきます。これは学生のみならず日本の社会においても起こっていることではないでしょうか。

ご近所の方や会社でがんであることを打ち明けた時、相手が返す言葉を失っている様子を患者さん自身が傷ついてしまう…、そんなお話をよく伺います。

これは、がん患者さんを受け入れることができる寛容で成熟した社会となっていないことが原因ではないでしょうか。まだまだ足りないことも多いと思いますが、教育を通して包容力のある社会を作っていくことが出来ればと願っておりますので、お力添えの程よろしく願います。

また、2016年三月七日（樋野先生のお誕生日）に「がん哲学塾」も開講いたしました。記念すべき第一回は樋野先生を講師にお招きして五月五日に開催します。がん哲学塾は内容、チラシの作成、広報等全て学生主導で行っております。チラシには「人間性を磨く場」とあり、これからのような

展開になるか私も楽しみにしております。がん哲学塾で育った若者達が、いつか全ての人にとって心地よい社会を作ってくれることを願います。これからも見守って行きたいと思っております。



東村山がん哲学外来メディカルカフェ ～出会いで生き方が変わる～



「がん哲学塾」と「がんプロ講演会」神戸薬科大学にて（5月5日）

カフェとの出会いに 生き方が変わる

東村山がん哲外来
メディカル・カフェ

大弥 佳寿子

私は乳がんの治療を続けて17年になります。地元に「東村山がん哲学外来メディカル・カフェ」を開設したのは、2014年の夏でした。その前年に樋野先生の「がん哲学」に出会い、「暖げな風貌」や「偉大なるお節介」、「マイナス×マイナス＝プラス」といったユニークな表現に心動かされ、そうこうしているうちに「気になる症候群」を発症しました。

発熱し、先生の講演を見つけては足を運び、各地のカフェへ参加し、2014年春の早稲田オープンカレッジ「がんと生きる哲学」の講座を受講する中、カフェ開設の機会をいただきました。それから毎月カフェを開き、毎回、20名ほどの参加があります。スタッフの方が受付や準備、ファシリテーターをして下さいますが、参加者の方も一緒に協力して下さい。空っぽの「器」の東村山のカフェに、皆さんがそれぞれの想いを盛って下さり、多くの方の人生物語に触れるうちに、辛く苦しいのは自分だけではないこと、対話を通して気持ちが癒されていることに気付きました。そして、いつしかカフェが私の生きがいになっていました。

思えば11年前、肺への転移を告げられた時、「この先どうなるのか。いつまで生きられるのか」との不安に押しつぶされそうになりながら一日中病気のことを考え、不確実なものに答えが欲しくてもがいていました。では、「がん哲学」との出会いが全ての不安を消してくれたのかといえ、そうではありません。ただ「先のこと」を頻りに問わなくなっただけです。検査結果に一喜一憂するのも、その振れ幅が以前より小さくなっただけです。

ですから、問題は何ら解決しておらず、病状も進行しているのですが、あの頃よりずっと軽やかな気持ちになれていることが不思議です。「やるだけのこと」をやった、あとはそつと心の中で心配すれば良い。どうせなるようにしかならないよ」との勝海舟の言葉が浮かんできます。自分の力ではどうにもならないことは天命に任せて、「やさしく、丁寧な、しとやかさ」を心掛け、カフェを続けて参りたいものです。「がん哲学」とは、良き出会いを通して、自らの内がちよっと変わることはないかと、私は思います。

「ややのいえ」と 偉大なるお節介

ややの家 代表
榊原 千秋

昨年12月8日(火)、北陸には珍しい暖かな冬の日差しの中、記念すべき「第1回偉大なるお節介症候群友の会」が、偉大なるお節介症候群の産みの親の樋野興夫先生と偉大なるお節介症候群第1号の吉川厚子さんをお迎えして、小松市末広町の「ややのいえ」でひらかれました。遠く長野県小諸から星野さん、那須塩原からは飯島さんが駆けつけて下さり盛り上げていただきました。

偉大なるお節介症候群認定選考10ヶ条は「役割意識&使命感」「練られた品性&練々たる余裕」「賢明な寛容さ」「実例と実行」「世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度」「軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする」「新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する」「「行いの美しい人」「冗談を実現される胆力」「ニューモアに溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物」で、診断基準は「暇げな風貌」「偉大なるお節介」「速効性と英断」

の3つです。私は、第1号の吉川さんの偉大なるお節介の恩恵に預かった一人で、樋野先生と出会わせていただき、柏でのがん哲学外来にもご一緒いたしました。

がん哲学外来とのご縁は、平成20年に遡ります。小松で樋野先生をお迎えして公開がん哲学外来を開催を予定していたその朝、ボランティア仲間の広崎看護師から「昨日、胃がんの告知を受けた。公開外来を受けたい」と希望され受けられました。手術半年後、広崎さんは、同病の関本さんと一緒に「いのちのすーぷの会」をひらかれました。その後、関本さんが体調を崩されICU入院された時、樋野先生がベッドサイドでがん哲学外来を開いて下さいました。樋野先生からいただいた「人生とは品性の完成である」という言葉を病床でもつらぬかれた清々しい最期でした。

「ややのいえ」は、平成27年8月八日にオープンしたコミュニティスペースです。「子どもも若者も大人も高齢者も病いや障がいを抱えても自分らしく主体的に暮らしていくことができるよう当事者の望みをまん中にして当事者や家族を含む地域の方々と多主体多職種医療保健福祉・教育関係者や行政や企業が協働して助け合えるしくみを創造する」スペースです。

暮らしの保健室、ちひろ助産院

排泄ケア総合相談おまかせうんちツチ、NPO法人ホームホスピスこまつ、訪問看護ステーションややのいえを併設しています。石巻でのがん哲学外来市民学会第5回大会の開催、おめでとうございませう。一人でも多くの方に愛を注がれる会になりますよう、盛会をお祈りしています。



和気あいあいとお花見のほか、一泊の旅行も楽しんでいます。右の建物は「がんサロン」。

がん患者サロン 「きずな」の紹介

京都桂病院
がん相談支援センター
入江 篤志

当院のがん患者サロンは2009年4月に開設し8年目となりました。開催日は毎月第1〜4火曜日10時〜15時まで。内容はお話を中心ですが、医師による勉強会や座ってできる体操なども定期的に行っております。敷地内にある一軒家をがんサロンとしてキッチンなどもありアットホームな雰囲気でお越し頂いた方には落ち着くと好評です。

サロン参加皆様さんのご要望で毎年1回一泊旅行を行っております。今年3月17日〜18日に南紀白浜へ私も含めて8名が参加。ゆつくり温泉に入り、おいしいごはんを食べ、サロンの改善や企画など時間をかけ話を伺いました。翌日はワールドアドベンチャーワールドでイルカショーやパンダを観て童心に戻って楽しそうに過ごされていきました。

この他、お花見、クリスマス会やサロンの機関紙も参加者の方に企画編集をお願いして年3回発行しています。がんサロンに初めて参加される方は相談員も一緒に話しを伺い、回答が必要な場合など

はがん相談として個別相談をさせていただきます。ご紹介した様々な企画はすべて参加者からの発案であり、アイデアが出ればすぐ実現するためのサポートを考えております。

昨年より全国のがん相談員に国立がん研究センターが認定する『認定がん専門相談員』制度がスタートし、相談員の質が問われるようになりました(江27年度は全国で216名、京都では私を含め9名が認定)。相談員に必要なことは、がんの知識・コミュニケーション技術の向上ばかりでなく、がん患者さん・ご家族がその人らしい生活・問題解決・意思決定を支援するため、寄り添い共に考える事が重要です。その為には日頃からがん相談員とがんサロン・患者会との交流も必要で、患者さんの悩みなど多くのことを理解できると考えます。ぜひ皆様には、相談員の質向上のためにも、どんな些細なことでもがん相談支援センターへご相談ください。

また、樋野先生から「偉大なるお節介症候群認定証」をいただき、スヴェンソンの京都メディアカルカフェにファシリテーターとして参加しております。がん哲学外来に微力ながら協力できるよう、次回七月の石巻のがん哲学外来市民学会のコーディネーター養成講座にも参加し、皆さんと共に学びさせて頂きたいと思っております。

春日部がん哲学外来 &メディカルカフェ 〜三年の歩み〜

代表 高野みどり

平成24年11月に、勤務先で手にした一枚のチラシで国立沼田病院で行われた「がん哲学外来」の講演会に参加したことが、がん哲学外来に関わらせていただくきっかけになりました。活動に参加して早三年になります。H26年6月の本誌第4号に「一年の歩み」を書かせて頂きました。今回は、その後の春日部・がん哲学外来&メディカルカフェの歩みと新たな課題について述べてさせて頂きます。

「速効性と英断(いいと思ったらずぐ実行)」で、がん哲学外来をはじめました。先ずは、この地に「がん哲学外来」ありとの広報活動を行うと同時に協力して下さるスタッフの獲得でした。

広報活動は、資金が全くありませんから、キリスト教会の日頃の活動のようにポスティングを行いました。玄関先にいる方がいれば、直接お声をかけお誘いしました。会堂の七割近くの席は埋めつくせました。二年目は、より多くの人々に関心を持っていただくために、会場を公民館としました。会場が

公的機関ということもあり、一般市民の参加が多く、100名余りの方々に「がん哲学外来」を知らせることができました。その後は、教会堂で開催し、年一回定期的に広報活動を目的に樋野興夫先生にご登壇をお願いしています。

今年も8月28日(日) 13時半〜16時に開設三周年記念の講演会を予定しています。内容は、講演会と心のオアシス(演奏会)、体験

談を中心に行います。心のオアシスは、メンバーの友人知人で趣旨に賛同して下さる方にボランティアでお願いをしています。テーマは、その年に発刊された先生の著書の題名です。スタッフの獲得については、はじめは五人のメンバーでした。今では、十人近い人がメンバーに加わるまでにになりました。

定例会は、毎月一回第3日曜日13時半から15時半の2時間です。三年を経過する中で、悲しいことではありますが、四名の方が召されました。そして、現在加療中のメンバーの多くは、病状が進み会場に来ることができないという状況にあります。

四月十七日の出来事です。積極的に治験に参加し病状が安定していたK氏は、何よりこの定例会を楽しみにしていました。しかし、転移が分かり身体の苦痛が増してきました。K氏に「出張カフェ」の試みが始まったことを伝え、今

日の定例会でK氏のことをお話ししますと伝えると「仲間に会いたい。」と声を詰まらせ、電話の向こうで涙していました。愛する仲間、間の苦痛が和らぐことを祈らずにおれませんでした。

今後、個別的な対応をより求められることも多くなることを念頭に、これからの会の運営を考える毎日です。

千葉県野田市に、この程樋野先生をお招きして、五月三日(火)13時〜15時半に姉妹会場として発足します。こちらは、コーディネートターの認定を頂くことになった高野が、個別に関われるカフェを行っていきたくと考えています。



佐久ひとときカフェ テーマは「排泄の悩み」
がん哲学外来研修センターにて(2016.4.9)



仙骨神経刺激療法を 受けて

佐久ひとときカフェ
加藤 世紀

自分の過去を思い出す時、「二度もこの世に生還した」私でしたが、年を重ねて、もうまさかの事はないだろうと思っていた矢先に、「直腸がん」の宣告を受けてしまったのです。

確かに衝撃でしたが、これまでの病歴から鑑みて余り動揺しませんでした。最初の診断では「抗癌剤と人工肛門が必須」と言われましたが、ぎりぎりの線で免れたこと、それから17〜18時間はかかる手術が7〜8時間で済んだ事等、私の味方になってくれた事が多々ありました。が、幸運はここまででした。退院後、後遺症として数々の問題に悩まされたのです。

若い頃から頑固な便秘と肛門括約筋が全く機能しない私にとつて、術後、かなりの負担が強いられることになり排泄の苦しみに翻弄される日々となりました。精神的にも憂鬱な日々が続いていたとき、「がん哲学外来カフェ」なるものを知り、思い切って参加したところ、心身共に癒され和やかなひとときが持てるようになったこ

とは救いでした。

「佐久ひとときカフェ」を皮切りに「浅間病院対話カフェ」、「軽井沢あうんの家カフェ」と、これらのカフェに出席する事が私のライフワークとなりました。

そうした中で「浅間病院対話カフェ」の席上、私がこれまで耳にした事のない「仙骨神経刺激療法」という排泄の新療法をお聞きしました。その日の講師は富岡寛行先生でしたが、後日主人と一緒に詳しいお話を聞くことができました。外国では大分前からこの療法が使われており日本でも厚生省の認可が下りていること、保険も適用になっていて長野県下浅間病院で初めての手術になるとのこと。また、この療法は尿失禁よりヒントを得ており、八割方は成功例が出ているとのことでした。

手術は二回行うということ、合わない人は第一段階で中止するも可能との説明を縷々お聞きして長野県下では第一号になるので多少の躊躇はありましたが、今より少しでも日常生活が改善が出来ればとの思いで挑戦をしました。術後、私が一番気になっていたトイレの回数は見事に半減をいたしました。そして手術をした事で現在の状況を更に改善するべく、工夫を重ねることで、生きる意欲が以前よりも増してきた昨今となったことは嬉しいことです。

第5回石巻大会 対談の司会を受けて

福井県済生会病院 外科

宗本 義則

「医療者と宗教者の協働」というテーマで、石巻赤十字病院副院長の鈴木聡先生と東北大学大学院文学研究科准教授で臨床宗教師の谷山洋三先生との対談の司会をすることになりました。大変光栄であり非常に興味のある面白いテーマかと思えます。学会の認定コーディネーターとしての最初の大仕事であり、決して自身が宗教に強いわけでもありません。多くの皆さんのように、「臨床宗教師てなに?」「何をしているの?」と疑問に思うレベルです。

医療者と宗教者がはたしてどういう協働ができるのか、いつでもどこで、どのように、などさまざまな疑問がわいてきます。震災を受けた石巻だからできるのか、他の地域では無理なのか、がん患者さんにあてはまるのかなどあげるときりがあります。その後の養成講座のグループワーク、翌日の市民学会のテーマ「ここに寄り添う」という本題につながるだけに聞きたいことが山ほど出てきます。

真に「ここに寄り添う」とは結論をださねばと、引き受けた司会ですがとても大変そうです。でもふと小生の頭には樋野先生の言葉のなかで最も好きな「人生いばらの道、されど毎日が宴会」という言葉が浮かんで来ました。皆さんとこのすばらしい対談を楽しみたいと思います。

第6回がん哲学外来コーディネーター養成講座 プログラム

日時：7月9日(土) 会場：石巻赤十字病院 災害医療研修センター

13:00~13:05	開会の挨拶	実行委員長 石巻赤十字病院副院長	鈴木 聡
13:05~13:30	ガイダンス 「がん哲学外来コーディネーターとは」	東海大学医学部血液腫瘍内科教授	安藤 潔
13:30~14:30	講演 「生と死に寄り添う～臨床宗教師の視点から～」	東北大学大学院文学研究科准教授	谷山洋三
14:40~15:45	対談 テーマ「医療者と宗教者の協働」	司会:福井県済生会病院外科主任部長 対談者:東北大学大学院文学研究科准教授 石巻赤十字病院 副院長	宗本義則 谷山洋三 鈴木 聡
15:45~18:30	グループワーク テーマ「ここに寄り添う」		
17:45~	夕食 <グループ毎に>		
18:40~19:40	グループ発表 <各グループ 5分>		
19:40~20:00	がん哲学外来市民学会認定コーディネーター認定証授与式	がん哲学外来市民学会 代表 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授	樋野興夫
20:00	終了		

※本講座の修了証授与は、翌日10日に開催する「がん哲学外来市民会第5回大会」(石巻)の午前部までの参加が必須となります。



事務局からのお知らせ

市民学会認定の条件は、

- ①がん哲学外来養成講座を3回履修する
- ②小論文(私の目指すがん哲学外来コーディネーター)のテーマで800字程度の提出
- ③がん哲学外来コーディネーター倫理規定遵守の誓約書(署名捺印)の提出です。

認定申請期間は毎年8月1日から10月31日、申請先は市民学会事務局です。認定委員会による認定作業は11月1日から12月31日までの間に行われ、翌年1月元旦に認定されます。

◇新たに認定された方々

- 沼田千賀子 (兵庫県)
- 小石川均 (石川県)
- 豊田 洋司 (大阪府)
- 西澤 文恵 (東京都)
- 長谷部孝美 (富山県)
- 宮本多美江 (東京都)
- 高野みどり (千葉県)
- 西田 良春 (石川県)
- 三浦 知子 (長野県)
- 風早謙一郎 (東京都)
- 山田 圭輔 (石川県)
- 山崎 久美 (長野県)
- 丸倉 直美 (埼玉県)
- 土屋千雅子 (東京都)
- 村上美恵子 (東京都)

編集後記

ニースライター編集人

星野 昭江

三か月前に逝ったTさんを追悼してのカフェで、在りし日のTさんの写真を映写したときのこと。「どの写真も笑顔ばかりね。ほら、この写真も笑って写っている...」。駆けつけて下さったご主人は映写されたスクリーンの中のTさんの笑顔を見て、涙をとめどなく流しておられました。

家にあつては、疼痛で呻吟していた日もあったと聞いています。ですが、「このカフェに来るのが私の楽しみ。そしてここは私の居場所」と言ってTさんはいつも人の話を穏やかな態度でニコニコと聞いていました。自分のことはさておいて、相手の話に優しい笑顔を向けていた素敵な女性でした。

樋野先生が講演会で良く話をされる「人生の目的は品性の完成にあり」という言葉...、まさにTさんの最期を想うとき、私にはこの言葉が真っ先に浮かんできます。

我が家の庭先の「小諸八重紅枝垂桜」が散りかけています。日暮れともなると野鳥たちが囁りながら花の蜜を吸いに寄って来ます。ヒヨドリも四十雀も仲良く、体を逆にして桜の花芯に嘴を突っ込んでいます。

遠く庭先の南の方向になだらかな稜線の蓼科山、八ヶ岳連峰にはまだ幾すじか残雪が見えています。